

<<口頭発表>>  
【9号館 9101教室】

(3月14日 10:00-10:30)

宮窪手話の「数」に関する表現  
—日本における危機言語—

平 英司, 矢野 羽衣子, 松岡 和美

世界には、ろう者の人口率が高い地域が存在する。そうした地域では「標準的」と考えられている手話とは異なる特徴をもつ手話が存在し「村落手話」と呼ばれている。そして、それらの「村落手話」は消滅の危機にさらされている。本研究では危機言語としての村落手話の収集、保存に資するべく、これまで研究対象とされることがなかった愛媛県大島の宮窪地区で使用されている村落手話である「宮窪手話」を研究対象として取り上げる。そして、宮窪手話の「数」に関する表現について、日本で「標準的」と考えられている日本手話と比較・分析を試み、その特異性を明らかにすることを目的とした。

結果、日本手話とは異なる「数」の語彙が存在することや紙幣のデザインを基にした金額に関する特別な「数」の表現が存在することが観察された。また、日本手話には見られないデジタル型の表現や桁数の多い「数」で日本手話とは異なる構成もみられ、その特異性が見出された。

<<口頭発表>>  
【9号館 9101教室】

(3月14日 10:35-11:05)

外来語が新たに獲得しつつある社会言語学的機能  
—異なる発話場面における既存語との使い分けにみる—

久屋 愛実

本研究の目的は、場面による外来語と既存語の使い分けのメカニズムをスタイル・シフティングの枠組みで捉え直し、外来語の社会言語学的機能について考察を加えることである。国立国語研究所(2005)が全国3,090人を対象に行った『外来語に関する意識調査II』の再分析を行い、「発話場面の公共性の高さ」というスタイルの違いにより話者の語彙選択がどう変化するのか、またその動機は何かといった話者内語彙バリエーションについて明らかにする。分析の結果、公共性の高い場面では全体的に既存語の使用が優勢ではあるものの、外来語が一部のグループ(若年・高学歴層)によって「知的な感じ」を示す手段として使用される傾向が認められた。これは既存語のもつ主な機能でもあったことから、公共性の高い場面において既存語より相対的威信が低い外来語が、既存語と同じような肯定的な社会言語学的機能を新たに獲得しつつあることがわかった。

<<口頭発表>> (3月14日 11:10-11:40)  
【9号館 9101教室】

偏った頻度分布はどこに宿るか?  
—表層パターンの分布分析に基づく統語発達に関する一考察—

吉川 正人

Zipf 則として広く知られている性質は任意の構文における動詞の頻度分布にも見られ、それが言語習得に重要な役割を果たしているという指摘もある。しかしながらこれらの研究で対象となっているのは[V<sub>OO</sub>]といった抽象的な構文パターン(所謂項構造構文)であり、このような抽象度の高い構造が本当に言語習得の過程で幼児の学習に活用されているかどうかは疑問の余地がある。分布の知覚には生起環境の認識が不可欠であり、生起環境の認識には構文の学習が前提になることから、論理的にも矛盾を指摘できる。本稿では、具体的な単語に根差したパターンがまず学習されそれらが徐々にまとめあげられることで抽象的な構文が獲得されるとする議論を受け、このような具体的なパターンにおける特定の生起位置に現れる単語の分布こそが重要であり、それがZipf 則に従うようなものになっていることを示す。

<<口頭発表>> (3月14日 10:00-10:30)  
【9号館 9102教室】

フォリナートークに対する意識についての一考察  
—日本語母語話者と日本語非母語話者の語りから見えてくること—

嶋原 耕一

フォリナートークの使用は、接触場面における対人関係の構築に良くも悪くも影響しうる。さらにその使用が母語話者に特権的であり、その使用により母語話者と非母語話者というカテゴリー対が強調されると考えられることから、それは両者の力関係にも影響を及ぼしうるといえる。そこで本研究ではその対人関係への影響に注目しながら、母語話者と非母語話者がフォリナートークの使用についてどのような意識を持っており、両者の間にどのようなずれがあるのか、明らかにすることを目的とした。その意識に焦点を絞ったため、分析対象としては母語話者8名と非母語話者8名に対するインタビューから得られた、語りを用いた。結果として、非母語話者との関係性を固定的に考えている母語話者や、フォリナートークについて不満を持ちながらも母語話者に対しては何も言わない非母語話者の姿などが、明らかになった。

<<口頭発表>> (3月14日 10:35-11:05)

【9号館 9102教室】

在カナダ日本人親の英語話者が参与する状況における言語行動意識

秋山 幸

本研究は、カナダで子育て中の（あるいはその経験がある）日本人移民家庭の親が子どもとやりとりをする際に、日本語を解さない英語（調査地公用語）話者が参与した場合の言語行動意識について調査したものである。

この調査によって、日本語を継承する子どもの親の言語使用に、親自身の社会化がどのように反映されているのかを見出すことを目的とする。ただし、ここでいう社会化とは、親自身が人との相互的にかかわりを通して社会の中でのあり方を模索していくことを指し、当該社会への一方的な順応を意味しない。

調査は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州に居住する<sup>10</sup>人の日本人親に対して行い、イラスト（場所、状況、参与者、トピックを指定）を提示し、言語行動意識について答えてもらった。親が聞き手として意識する範囲に焦点を当て、親の言語行動意識に表われる言語選択の態度について分析を試みる。

<<口頭発表>>  
【9号館 9102教室】

(3月14日 11:10-11:40)

ナラティブの協同構築による自己開示  
—英語会話と日本語会話の比較—

岩田 祐子

本研究の目的は、会話における自己開示はしばしばナラティブによって行われることに着目し、相互行為としてのナラティブ分析の立場から、話し手と聞き手がどのようにナラティブを協同構築するのか、ナラティブの中で自己開示がどのようになされるのかを明らかにすることである。

本研究で分析した会話データは、日本語母語話者による日本語会話5本とアメリカ・イギリス・オーストラリアで収集した英語母語話者による英語会話各5本である。

分析結果としては、英語会話では、話し手のナラティブに聞き手が積極的に関与することにより、ナラティブを協同構築し、その中で自己開示も協同で行われている。

一方、日本語会話では、ナラティブは話し手によって語られ、聞き手はあいづちを打ちながら耳を傾ける。日本語会話においては話し手がナラティブを語り、聞き手はあいづちや質問によってナラティブを支えている。話し手も聞き手も自己開示が小さい

<<口頭発表>>  
【9号館 9103教室】

(3月14日 10:00-10:30)

What Is Left, What Is Passed on: Transformation and Sustainment  
of Indigenous Culture through Communicative Multiple Literacies

長谷山 康一

This study reports on a small-scale field investigation through participatory observation (Spradley, 1980) at a local festival where truth and reconciliation in diversity of multiple ethnicities are the inhabiting theme, in Vancouver, Canada. I employed a “partially ethnographic” (Marshall, 2014) approach, seeing myself as an ethnographer, who is the “ultimate instrument of fieldwork” (Heath and Street, 2008, p57). Through the fieldwork, two associated themes have emerged in the use of participants’ multiple literacies (Kalantzis & Cope, 2013): valuing (1) available materials at the very moment situated in (2) story-based communication. These themes were examined through analytical lenses informed by “place literacy” (Somerville, 2007) and “designs of meaning” (New London Group, 1996; Stein, 2004). The findings suggest that culture is sustained and transformed through meaning making processes (Stein, 2004) depending on the environmental availability at the very moment of communication through multimodal literacies, each of which is uniquely valued by individuals.

<<口頭発表>> (3月14日 10:35-11:05)  
【9号館 9103教室】

The Australianの中の日本  
—国際司法裁判所における調査捕鯨の違法判決報道と読者のコメントの分析—

山口 征孝

本稿の目的は、捕鯨報道により日本人に対する人種的ステレオタイプが再生産されていることを、豪州The Australian紙に掲載された記事とそれに対する読者のコメントをデータとして分析することにより示すことである。理論的枠組として「間接指標性」という概念を援用する。具体的には2014年3月、日本の大西洋上の調査捕鯨に対して、オーストラリアが提訴した訴訟の結果、違法判決が国際司法裁判所（ハーグ）で下されたことを報道する記事を中心にみる。その際、「捕鯨報道におけるテキスト間連鎖の間接指標的機能は、日本人に関する否定的ステレオタイプの再生産である」を作業仮説とする。分析により「法律を守らない日本人」、「残酷な日本人」、「陰険な日本人」などの否定的イメージが再生産されたことを示す。今後の課題として、読者が参加できる反捕鯨サイトを研究することで経験的基盤を更に強化できると提案する。

<<口頭発表>> (3月14日 11:10-11:40)  
【9号館 9103教室】

ニューハーフの彼女を親に紹介するために  
—社会的言説との関係において行われるアイデンティティの再カテゴリー化—

松谷 優花

本論文の目的は、語りの分析を通し、私たちがいかに、強力な社会的言説に対応し、それに逆らうような目的を達成することが出来るのか、をアイデンティティの共同構築という視点から明らかにすることである。本論文では、「ニューハーフ」という、現代日本の社会的言説においては、通常から逸脱したものとして扱われているアイデンティティに着目する。データとしてはあるバラエティー番組の放送内容を使用する。分析手法としては、ナラティブ研究の中でもポジショニング分析という手法を用いる。分析の結果明らかになったことは、第一に、未だ日本においてはニューハーフに対する社会的言説は批判的であり、その社会的言説を覆す試みを行うことは容易ではないということである。第二に、その社会的言説を覆さないまま、その場における短期の目的を達成する戦略が選ばれ、その手段として「再カテゴリー化」という手段が可能であることが明らかになった。

<<口頭発表>> (3月15日 13:00-13:30)  
【9号館 9101教室】

「反論」における日本人英語学習者のHedgeの使用について

野澤 佑佳子

本研究では、「反論」というコンテキストにおいて日本人英語学習者がどのようにポライトネス・ストラテジーを鑑み、会話の中でHedgeを使用するかを調査する。日本人学習者の会話分析・インタビュー調査を行った結果、日本語の場合と同様に年齢差や初対面といった要因がHedgeの使用に影響していると考えられるが、英語の学習環境や英語圏への滞在歴、英語力といった他の要因も多分に関係するとみられる。

「改まり」とは何か  
—指標性の観点から考える言語表現の社会的意味—

李 址遠

本研究では、言語表現によって表される「改まり」を指標性 (Indexicality) の観点から捉えることで、その意味の本質を明らかにし、言語表現によって表される様々な社会的意味を考えるための理論的方向性を示すことを試みた。「改ま—」という語幹を含む語に対する共起関係の調査、及び、「改まり」を刺激テーマとした語自由連想テストの結果を基に「改まった」場面を構成する様々な物事がなす関係の構造を考察し、「改まり」という意味の本質が「明確な目的に基づいて成立し、その目的の実現を志向する行為にふさわしい社会的関係のみが前景化した場面上の性質」にあることを明らかにした。このような捉え方は、「改まり」を表すとされてきた様々な言語表現の内容および形式が、どのようにしてその機能を果たすことができるかという、言語表現の意味に関する社会記号論的考察を可能にするものであると考えられる。

<<口頭発表>>  
【9号館 9101教室】

(3月15日 14:10-14:40)

親密な関係性では不満はどのように表明されるか  
—中国人夫婦・日本人夫婦の比較—

呉雪箏

本研究では親密度が高い夫婦関係で、日本人と中国人がどのような不満表明のストラテジーを使用しているかを、妻側に対する談話完成テスト (DCT) とアンケート調査を通して比較分析した。DCT調査では、三つの場面でどのように不満を表明するかを調べた。その結果、6つのストラテジー (回避、暗示、依頼、説教、指示、攻撃) にまとめられ、日本人妻には「依頼」「回避」の不満表明ストラテジーに属する言動が中国人妻より多く出現することが明らかになった。アンケート調査では二つの場面でのストラテジーの使用可能性を5段階で調査した。t検定で各ストラテジーの平均値とp値を算出したところ、日本人妻は中国人妻より「攻撃」を使用しないこと、中国人妻は日本人妻より「依頼」を使用しないことが明らかになった。これより、不満表明の場面におけるFTAの軽減ストラテジー使用頻度が日本人妻に有意に高いといえる。

<<口頭発表>>  
【9号館 9101教室】

(3月15日 14:45-15:15)

日本語とスワヒリ語における「勧誘の断り」の対照研究  
—断り後の展開に着目して—

中垣 友江

本発表では、日本語とスワヒリ語における「勧誘の断り」の会話を扱い、とくに被勧誘者が断りを述べた後のやりとり（「断り部」「再勧誘部」「終結部」）に着目する。場面①「昼ごはんの勧誘」と場面②「二日後の晩ごはんの勧誘」を設定し、親関係の日本語母語話者同士、ケニアのスワヒリ語話者同士のロールプレイデータを対照分析した。その結果、日本語では場面①と場面②で【謝罪】や次回への言及の現れ方に違いがあったが、いずれの場面も「再勧誘部」が現れない傾向が見られた。被勧誘者の状況を察し早く断りを受諾する。それに対しスワヒリ語は、どちらの場面も「再勧誘部」が現れる傾向が見られた。勧誘者は、断りの理由を聞く、同情を求めるなどし、積極的に被勧誘者の気持ちを受諾へ向かわせようとする。次回への言及は「再勧誘部」で行われ、勧誘者は被勧誘者と次回一緒に行くことをお互いに合意した時点で断りを受諾し「再勧誘部」を終わらせていた。

<<口頭発表>>  
【9号館 9101教室】

(3月15日 15:20-15:50)

「ゲームの説明と準備」という活動における「冗談」  
ーラポールの維持・強化と成員性に着目してー

臼田 泰如

本研究では、テーブルトークロールプレイングゲーム (TRPG) を行っている場面において、進行役による説明に冗談が応接される場合について分析する。本研究の目的は、こうした冗談は何のために発話されるのか、および、それを可能にする条件とは何か、を明らかにすることである。このような冗談を分析するため、会話分析における連鎖分析・成員カテゴリー分析の手法を用いる。結論は以下である。説明に後続する冗談は、さらに後続する位置で他の参加者がさらなる冗談や笑いを発することができる場所を作り出すことができる。このように他の参加者による発言や笑いなどがレリバントになることで、ラポールの維持・強化に寄与していると考えられる。さらに、そうした形の冗談発話には、冗談を発話する人物と進行役との関係、および場の参加者との関係や、それぞれのゲームに関する知識などからなる「成員性」が重要な条件となる。

<<口頭発表>> (3月15日 13:00-13:30)  
【9号館 9102教室】

The Organization of Turn-Taking in a University Language Lounge

バターフィールド ジェフリー

Previous research in conversation analysis has focused on turn-taking in a variety of institutional settings such as news interviews, emergency calls, hospitals, and classrooms. This study analyzes university language lounge interaction from a conversation analytic perspective and investigates how turn-taking is organized, what interactional devices are used by speakers to select a next speaker, and how participants orient to their identities throughout the interaction. An analysis of the data revealed that turn-taking in the language lounge was similar to that of a traditional classroom setting in that the students mainly spoke only when selected by the teacher and teacher talk time far surpassed that of the students. The findings also revealed the significance of how participants oriented to their roles as teacher and students and how this affected the organization of turn-taking throughout the interaction.

<<口頭発表>> (3月15日 13:35-14:05)  
【9号館 9102教室】

次話者として選択されていない会話参加者の発話権の取得

山岸 宏明

本研究では、会話の「順番取りシステム」(Sacks, Schegloff and Jefferson(1974))から逸脱した、次話者として選択されていない会話参加者に着目し、どのように発話権を取得しているのかを明らかにすることを目的として、発話の調査を行った。三人で行われる会話を録音、録画し、トランスクリプトしたものと録画を用いて、次話者として選択された会話参加者と選択されていない会話参加者とをGoffman(1981)の「参与の枠組み」を用いて分類した。そして、次話者として選択されていない会話参加者の発話と次話者として選択された会話参加者との発話の比較を行った。

次話者として選択された会話参加者と、次話者として選択されていない会話参加者とでは、発話を始めるときの行為に、違いがあることがわかった。次話者として選択されていない会話参加者は、発話権を取得するために、発話の特徴付け、役割の明確化、発話の競合をしていることが分かった。

<<口頭発表>> (3月15日 14:10-14:40)  
【9号館 9102教室】

## 接触場面における共同発話

大久保 加奈子

会話は複数の話者の相互行為によって構築されていく。本研究では、複数の話者が共同で一つのまとまった発話を完成させる「共同発話」に焦点をあて、「立命館大学日本語学習者コーパス」をデータとして用い、分析を行う。

分析の結果、明らかになったのは以下の二点である。

1) 接触場面では、相手の言いたいことを予測して補完する用例以外にも、母語場面では見られない、相手の発話を引き取り、自分のことばを付け加える用例が見られた。2) 相手の言いたいことを予測して補完する用例では、母語場面においては相手の発話内容に対する賛同や共感を示すものが多いのに対して、接触場面では相手の発話の意味を確認するために共同発話が用いられることが多かった。同じように共同発話を用いていると言っても、母語場面と接触場面ではその用いられ方には違いが見られることが明らかになった。

<<口頭発表>>  
【9号館 9102教室】

(3月15日 14:45-15:15)

三者間の共同作業における言語行動の日露対照分析  
—発話の重なりに着目して—

Tsoy Ekaterina

本発表は、親疎関係が異なる三者間の共同作業の会話における発話の重なりを分析したものである。分析方法として、重なりの発生位置や重なった発話の機能に焦点を当て、話者の親疎関係という観点から日露の対照比較をした。その結果、ロシア語では「話者交替狙い」の重なりが多く、共同作業の場面では、話者は作業の主導権を握るために重なりによってターンを獲得することが見られた。重なりによって話者が交替を迫られることになるため、ロシア語では初対面の話者は長い重なりを受けることは友人同士より少なかった。それとは逆に、日本語では長い重なりは初対面と友人の一人の話者の間に生じることが多かった。初対面の話者は共同作業に参加できるよう実質的な発話を、友人同士の話者は相槌的発話を重ね、同調することによって初対面の話者を作業に引き込むことが見られた。

<<口頭発表>> (3月15日 15:20-15:50)

【9号館 9102教室】

日本人と外国人の英語による初対面会話における関係性の構築  
—Japan/Japanese (+NP) をめぐる相互行為の分析—

山本 綾

日本人と外国人が英語を媒介言語として会話に参加するとき、両者の間にはどのような関係性がどのように構築されるのだろうか。本研究ではこの問いに対する答えを探ることを目的とし、初対面の日本人と英語圏出身者による二者間の英語での雑談を資料として調査を行った。日本語で会話を行った場合の分析（杉原(2010)ほか）をふまえ、Sacks (1972) による成員カテゴリー化に関する概念を用い、会話参加者の相互行為を観察、検討した。その結果、以下の点が明らかになった。

- 日本人は、「質問-回答」型隣接応答ペアを通して、英語圏出身者との間に「日本人対非日本人」という関係性を提起する

- 英語圏出身者は、「日本人対非日本人」という関係性を受け入れその維持・強化に貢献することもあるれば、その関係性に抵抗し、組み替えを促すこともある

<<口頭発表>> (3月15日 13:00-13:30)  
【9号館 9103教室】

連鎖をつなぐ資源  
—語りにおける先行ジェスチャーの繰り返しについての会話分析研究—

安井 永子

本研究は、日常会話における、他者による先行ジェスチャーの繰り返しを検討するものである。特に「語り」の中で産出されるジェスチャーを、別の話し手が語りの中で繰り返す現象について、会話分析の手法を用いて検討する。分析したデータは、友人同士の日常会話のビデオ収録である。データからは、先行する話し手の語りにおけるジェスチャーが、次の話し手の語りにおいてそのまま繰り返される場合、一部のみが繰り返される場合、先行するジェスチャーそのものではないがそれと同じ特徴を持つ動きが繰り返される場合、の3つの繰り返しパターンが観察された。本発表では、語りの中で産出されるジェスチャーを次の語り手が繰り返すことが、先行する語りと現在の語りとの直接の関係を示す手段となるだけでなく、ジェスチャーの異なる繰り返し形式によって、先行する語りに対する異なる行為やスタンスを示しながら次の語りを行うことができると議論する。

<<口頭発表>> (3月15日 13:35-14:05)

【9号館 9103教室】

確認要求に用いられる認知的スタンス標識としての「なに」について

遠藤 智子, 横森 大輔, 林 誠

本研究は極性疑問文に用いられる感動詞的用法の「なに」について、会話分析の手法を用いた実際の自然会話の検討を通じ、以下の事を主張する。まず、「なに」は認知的スタンスマーカである。示されるのは「知らない・わからない」というスタンスであり、これは「相手よりも話題について知識の少ない者である」という立場や、確認内容に対する話者の確信度の低さの表明につながるものである。このスタンスを利用して、話し手がまだ明言していないがほのめかした内容に関する聞き手の理解の確認要求や、言及されていないことについて確認要求をすることでトピックを展開したり移行したりするといった行為が達成される。さらに、この認知的スタンスを基盤として、驚きや批判のような感情的・評価的スタンスを示すという拡張が起きる。

<<口頭発表>> (3月15日 14:10-14:40)

【9号館 9103教室】

他者開始修復連鎖においてものを「知らない」ことはどう扱われるか

平本 毅

本発表では、会話分析の枠組みを用いて、人がものを「知らない」ことが日常会話の中で取り扱われる仕方をみたい。具体的には、他者開始修復連鎖の中でもものを「知らない」ことがどうあられ、扱われるかを調べる。発表では本来行われていた活動の進行性を損なう（修復実施本体とは別のトークンの利用や「診断」の生起等々）形で修復連鎖が進行することが、修復開始を行った者のものの「知らなさ」に焦点を当てた活動であることを例証したい。

<<口頭発表>> (3月15日 14:45-15:15)

【9号館 9103教室】

ほめとして理解可能な発話に対する聞き手の「そうですか?／そう?」の応答の分析

張承姫

本研究は、ある発話がほめとして理解可能であるときに、聞き手がその発話の直後の応答として「そうですか／そうなんですか」あるいは「そう?／そうなの?」（以下、「そうですか／そうなんですか」「そう?／そうなの?」を「そう系」の応答とする）を用いる現象に焦点を当てて分析を行う。本研究の目的は、ほめとして理解可能な発話に対して「そう系」の応答がいかなる行為を行っているのかを会話分析を用いてより詳細に検討することである。

<<口頭発表>>  
【9号館 9103教室】

(3月15日 15:20-15:50)

マルチアクティビティとしての歯科診察  
—関与配分の相互行為的調整—

坂井田 瑠衣, 諏訪 正樹

歯科診察場面では、歯科医師と患者が発語により行う問診と、歯科医師が患者の口内を観察する視診が、マルチアクティビティとして組織される。診察は歯科医師が先導するため、患者は歯科医師が関与する活動に追従する必要がある。本発表では、患者が能動的に歯科医師の身体を観察し、問診と視診への関与配分を調整することで、診察が相互行為的に遂行されることを映像分析により示す。歯科医師が視診を開始する際、患者に口を開くよう言語的に指示する場合も、患者は指示を待たず口を開き始める様子が多く見られた。患者は歯科医師の身体を積極的に観察し、関与配分の変化にいち早く追従すると考えられる。なかでも歯科医師が問診しながら視診の準備を始めるとき、患者は口を開きつつ、視診開始の直前まで頭部のうなずきによる問診への反応を続けていた。関与配分の変化に最大限追従するため、患者は発語とうなずきを臨機応変に使い分けていることが示唆される。

<<口頭発表>> (3月15日 13:00-13:30)

【9号館 9104教室】

在日中国人留学生同士による中国語ベースの会話におけるコードスイッチング  
—機能的分析を中心として—

李敏

現在の日本は多文化多言語社会になりつつあり、日本に在住する外国人が年々増加している。その中に、中国人留学生をはじめに、中国人の割合が圧倒的に高い。日本文化と母国文化の衝突、日本語と母語の接触というような両文化、両言語を基盤に生活している留学生たちにとっては、どのような言語生活、言語選択をしているのかが大きな課題となる。本研究では、二言語環境下で生活している中国人留学生同士が、中国語を基盤として日本語へのコードスイッチング（以下はCS）という言語使用現象を明らかにするために、中国人留学生同士が行った会話を対象として、機能の観点から分析を行った。その結果として、学習歴が長い中国人日本語学習者同士の日常会話では、母語をベースとする日本語へのCSは頻繁的に行われている。このような多数のCSはコミュニケーションをスムーズに進めるため、話者の無意識的または習慣的な行為であるということが分るようになった。

<<口頭発表>> (3月15日 13:35-14:05)  
【9号館 9104教室】

現代韓国語における‘-a/e tulita(～てさしあげる)’に関する一考察  
—利益・不利益の観点から—

金 アラン

韓国語の‘-a/e tulita’は、日本語の「～てさしあげる」に当たる形である。しかし「その鞆、私が持ってさしあげます」のような文が韓国語ではごく自然であるのに対し、日本語では恩着せがましさや押しつけがましさを感じさせる等、両形式には違いも見られる。本発表では、韓国語の‘-a/e tulita’の特徴として次の2点を指摘する。

(1)‘-a/e tulita’は「力になってさしあげます」のように客体に利益となる場合だけでなく、「心配をかけて[さしあげて]申し訳ありません」のように客体に不利益を与える場合にも用いられる。

(2)「力になってさしあげられず」のように客体に利益をもたらさない時の‘-a/e tulita’は「～てあげる」に当たる‘-a/e cwuta’に置き換えられるのに対し、「心配をかける」のようにその行為自体が客体にとって不利益といえる時の‘-a/e tulita’は‘-a/e cwuta’に置き換えられない。

<<口頭発表>> (3月15日 14:10-14:40)

【9号館 9104教室】

中国人日本語学習者における「～テモラウ」文の言語形式の使い分け  
— 依頼機能を中心に —

張麗

中国人日本語学習者を対象とする依頼表現の習得研究では、学習者は依頼相手や用件など場面にかかわる状況を的確に判断し、その場に応じた言語表現を選択する言語運用能力が足りないことが指摘されている。その中で、特に、「～ていただけませんか」を代表とする「～テモラウ」文の言語形式の多用、不適切な使用が顕著である。しかし、従来の学習者を対象とした研究では、依頼場面における言語使用の実態や、依頼目的達成までのストラテジーの使用を母語話者との比較を中心に行っている。学習者の学習段階の発達プロセスはいまだ明らかとなっていない。そこで、本研究では、「～テモラウ」文を取り上げる。4つの学習段階における中国人日本語学習者が、丁寧さが異なる「～てもらえる？」（普通体）、「～てもらえますか」（丁寧体）、「～ていただけませんか」（敬語体）の表現をどのような依頼場面で使用するのか、母語話者との比較によって明らかにする。

<<口頭発表>>  
【9号館 9104教室】

(3月15日 14:45-15:15)

敬語表現としてのテモラウ文の日韓対照研究

—「道案内」の調査を通して—

林 世涓

日本語の授受補助動詞であるテモラウは、従来からの研究においては、受益が生じる側が用いる表現であるとしている。本発表では「道案内」の調査を通して得られたテモラウが敬語表現として使われているという実態に基づき、従来の研究とは異なるテモラウの新たな機能を明らかにすることを目的とする。